

小笠原島紀事

卷之二十

丹島真景圖

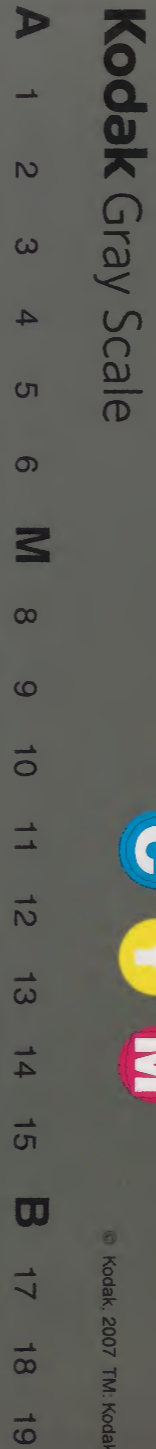
廿二

農商務省
圖書
第 號
冊 共

和書門
類 號 函 架 冊
八 二 三 三
一 二 二 三
七 二 二 三
四 四 四 三
三

內閣文庫
和書
類 號 冊 架
八 二 三 三
一 二 二 三
七 四 四 三
四 三 三 三

內閣文庫	
番號	和 8174
冊數	33 (22)
函號	173 180



小笠原島紀事卷之二十

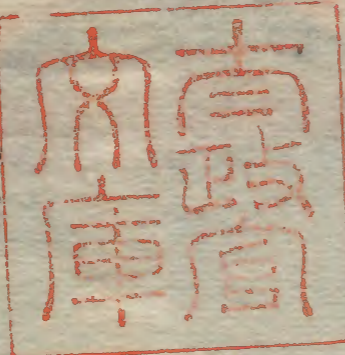
目錄

小笠原島真景圖 世島部

小笠原島真景圖

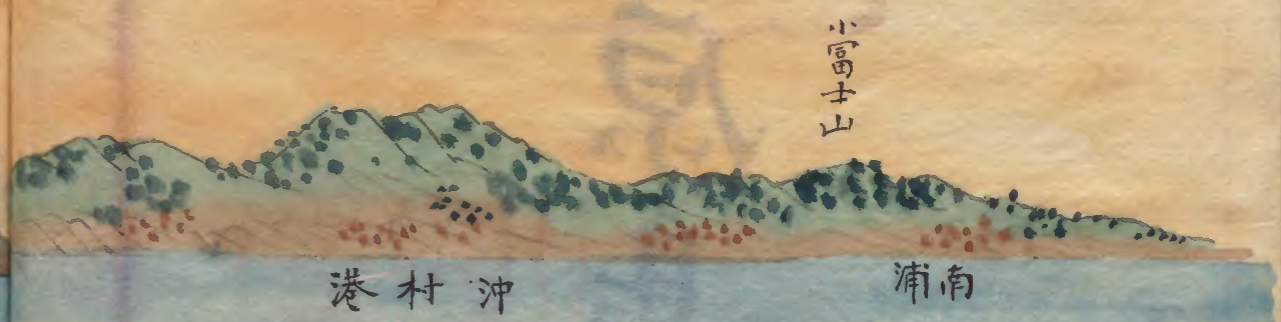
世島部

小笠原島真景圖
母島之部



Blank page with faint vertical lines and ghosting of text from the reverse side.

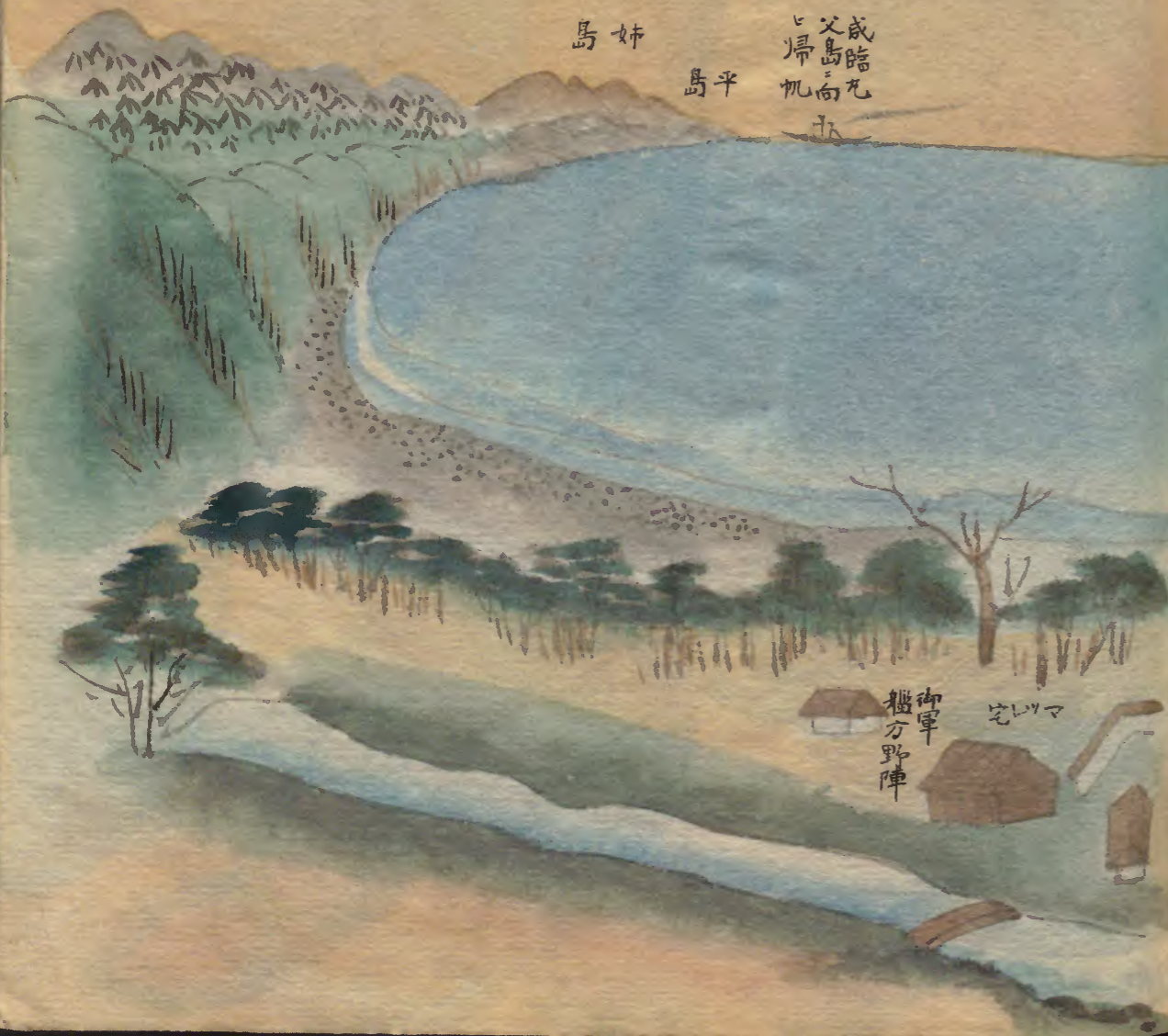
二月十日父島より
母島へ渡海咸臨丸
船中より全島西南
山面を見、姉妹諸
島丸を四外あり



兜岩
へルリ
紀行
鬼岩と



母島沖村港之図 補



島姉

島平

成踏丸
父島向
と帰帆



島向

役借住ス
マツレ
別宅

野猪柵

豚園

母島沖村マレソシ持
畑地ノ圖

梅

畑 芋

印の辺へ
朝陽丸の
水主一人
埋葬せ

別宅上陸後
此家ヲ賃借也

英人
マシエロムシ
マツレシ宅

基所

基所

芋畑

芋畑

西

芋畑

芋畑

葱畑

芋畑

水
芋畑

畑

北



母島沖村
かしく
夷女
舞躍之
圖



母島の内
沖村港湾中
西の方較々崎々
巽の方と観望す

滝晴日
統け
水酒子

饅頭島
ト唱



母島之内
沖村の北乳房山より
南望の図

島 姪

島 妹

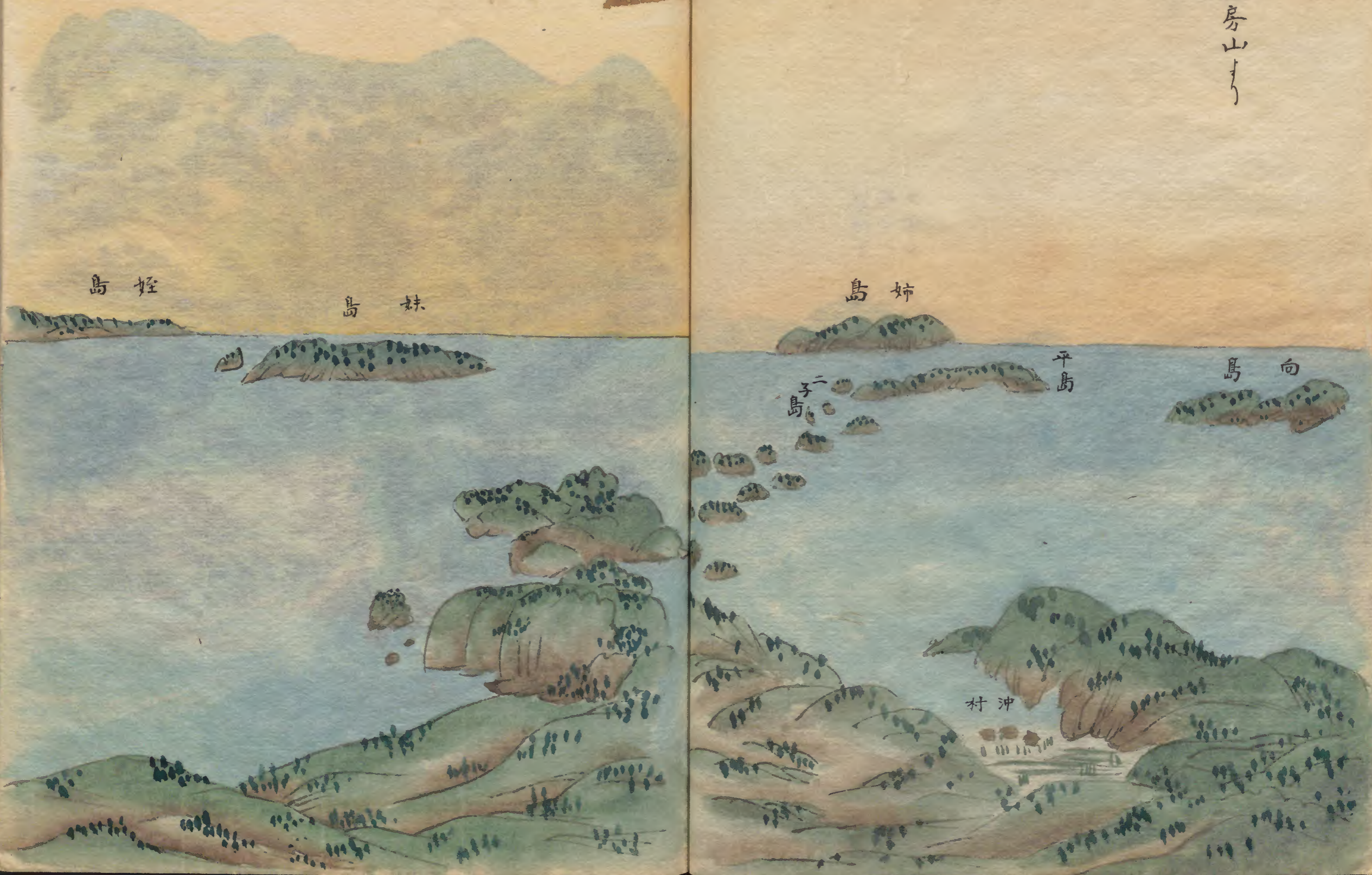
島 姉

平島

島 向

子島

沖村



初寐浦を
海上より
望図



長
四
四

母島の内
沖村の北
乳房山よ
り東洋

此山上
藤九郎と云
鳥ノ巣多
徑手ニ
捕ふヘ
藤九郎と云
天信翁の
事ニ

妹島

姪島

其二
同上
左の方と見ろ



山
景
記
一
日
遊
山
記
一
日
遊
山
記



母島の内
北港

二月廿一日廿二日巡見の
節全権初め兩夜此所
に露宿す
此邊野猪多し帰途
一日に四頭を獲り



東母島の内
港古名片港と云
荒波こゝ小舟寄
雖



母島之内
西港の景

母島之内
西港の景



母島の内
東港の岬

石門あり

高十丈幅

七八丈も

石の壁に猛波まで

小舟寄舵一

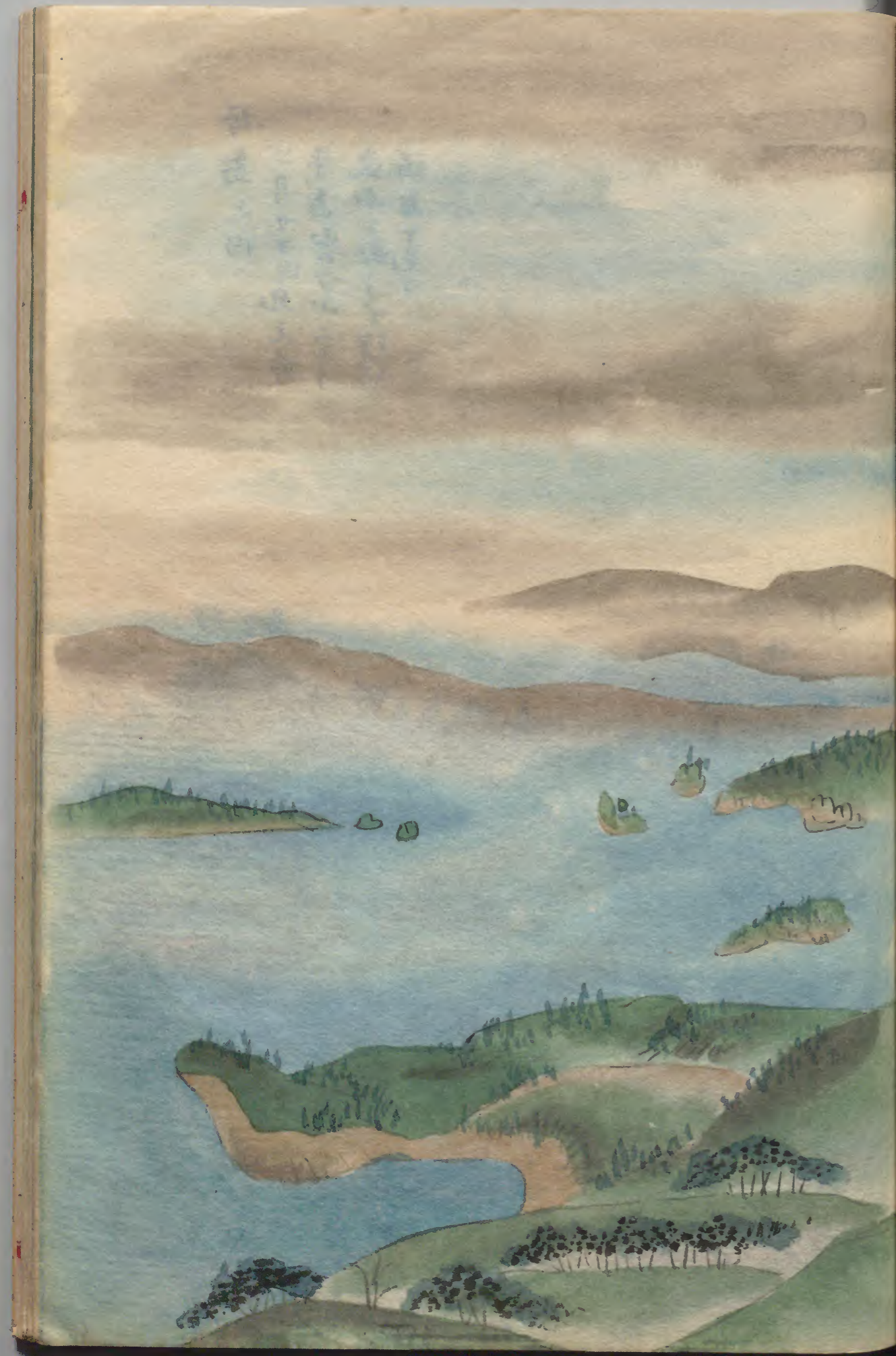


母島之内

二月十九日西全権
巡見之節南浦より
北の方着船を一處



母島之内
南浦小富士山
頂上より西北の
方を見る



母島之内
二月廿日巡見之節
平島西の方山上より
東南の面して姉妹
諸島を見り

姉島

妹島

姪島



母島属島平島

北の方山上より東岬の方
母島と眺望す

衆島周圍より湾中
の如く較魚多く尾簪不
て潮波を打音数里の外
より響く其様鹽中の鮒を
見ると似る也



其二



母嶋
属嶋の内
白嶋
丑寅の方
海上より
望

姉嶋
平嶋丑寅
寅の方山
上ヨリ未
の方向
て見る

妹嶋
平嶋丑寅
の方山上より
巽の方より

姪嶋
日方
卯辰の方
より

兄嶋野陣
濱業港寺
於く雨中露
宿の体如此



山田日記
五月



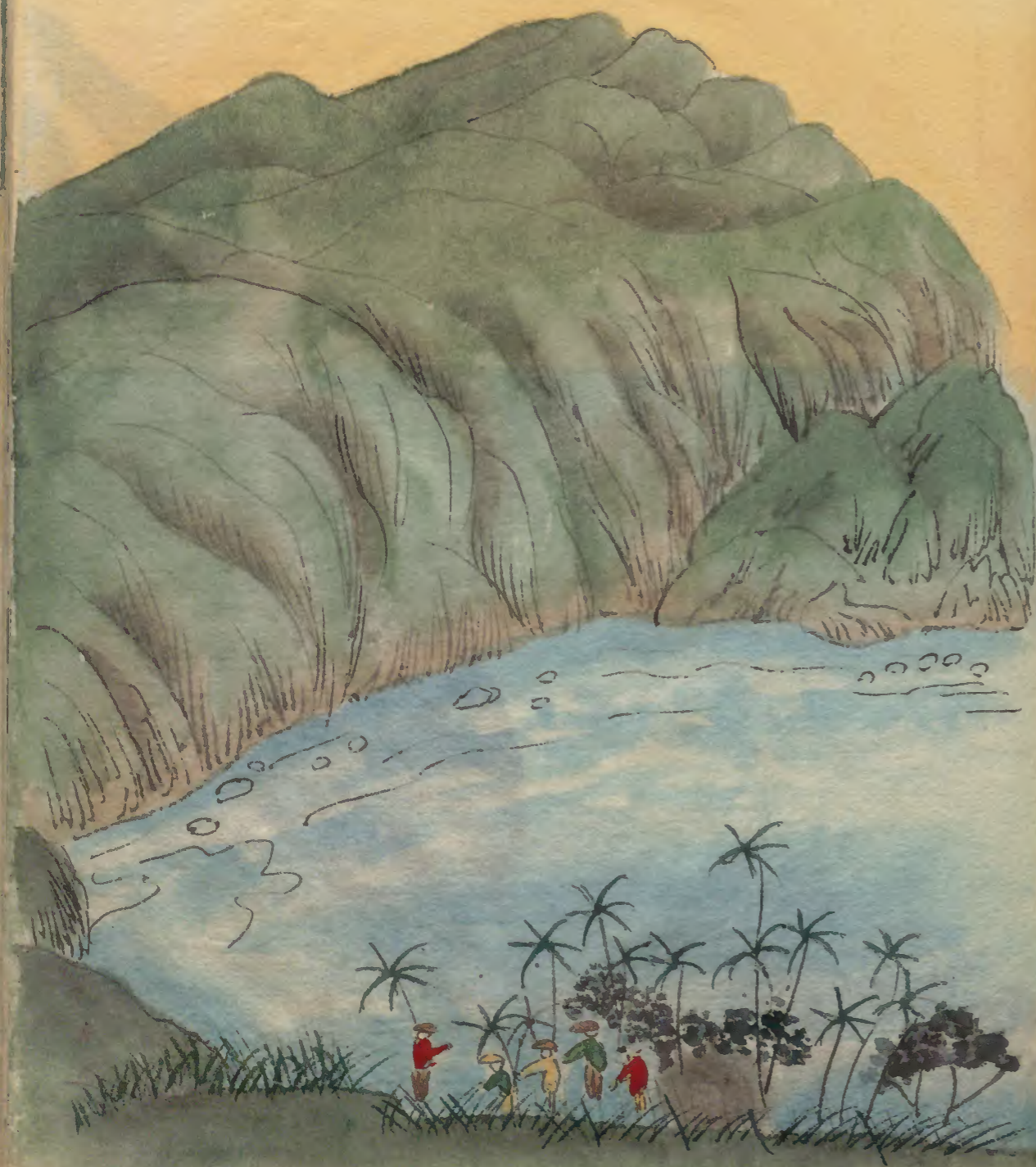
母島南浦の圖
補

島向

島姉



九
島
山
上
望
父
島
の
図



母島山上望父島の図
補

島父



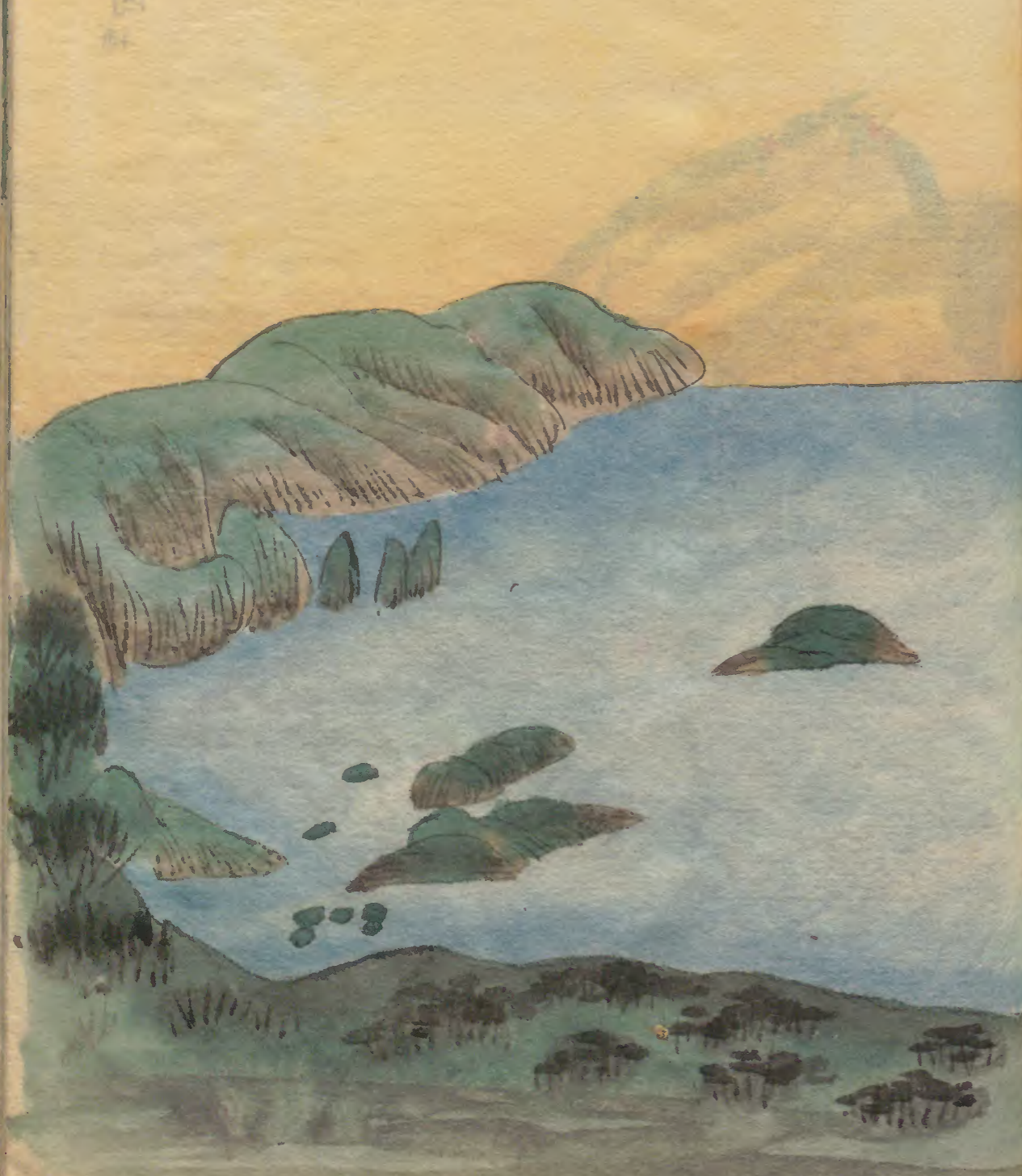
母島北村後之山
上眺望之圖



母島北村後之山
上眺望之圖



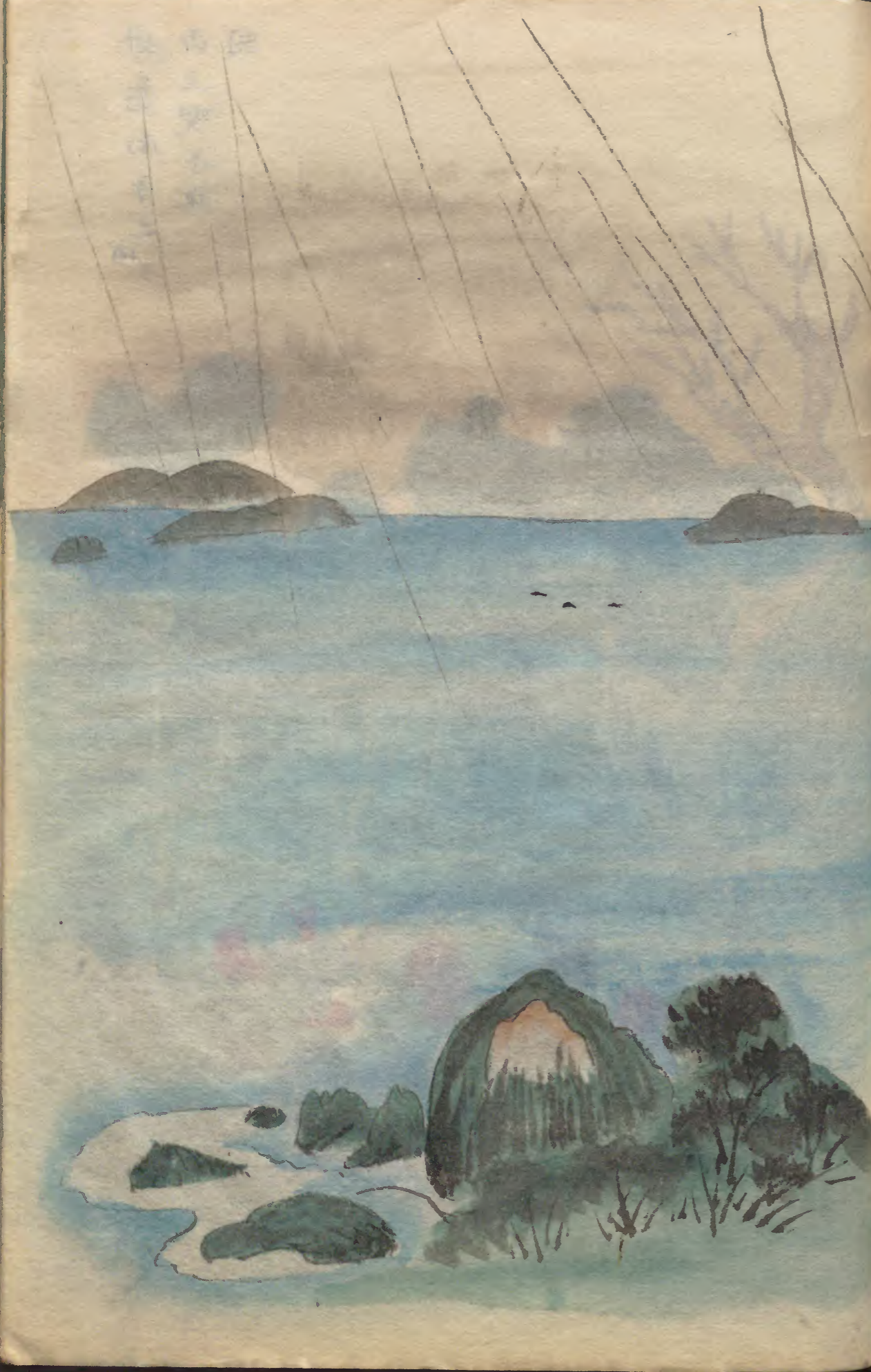
母島北村港左之方
湾中眺望之図 補



向鳥山上眺望之図補



母島較之浦雨中
梁敷園補



母島南手之補
山上喫午飯
圖



母島乳房山上
肥望之園補

島父



成三月十日
咸臨丸歸途洋中
遇亞米利加鯨魚
船圖補





ラロート唱
 皇国人呼て硝の是とふ
 大さゝハ高拾間余とふ





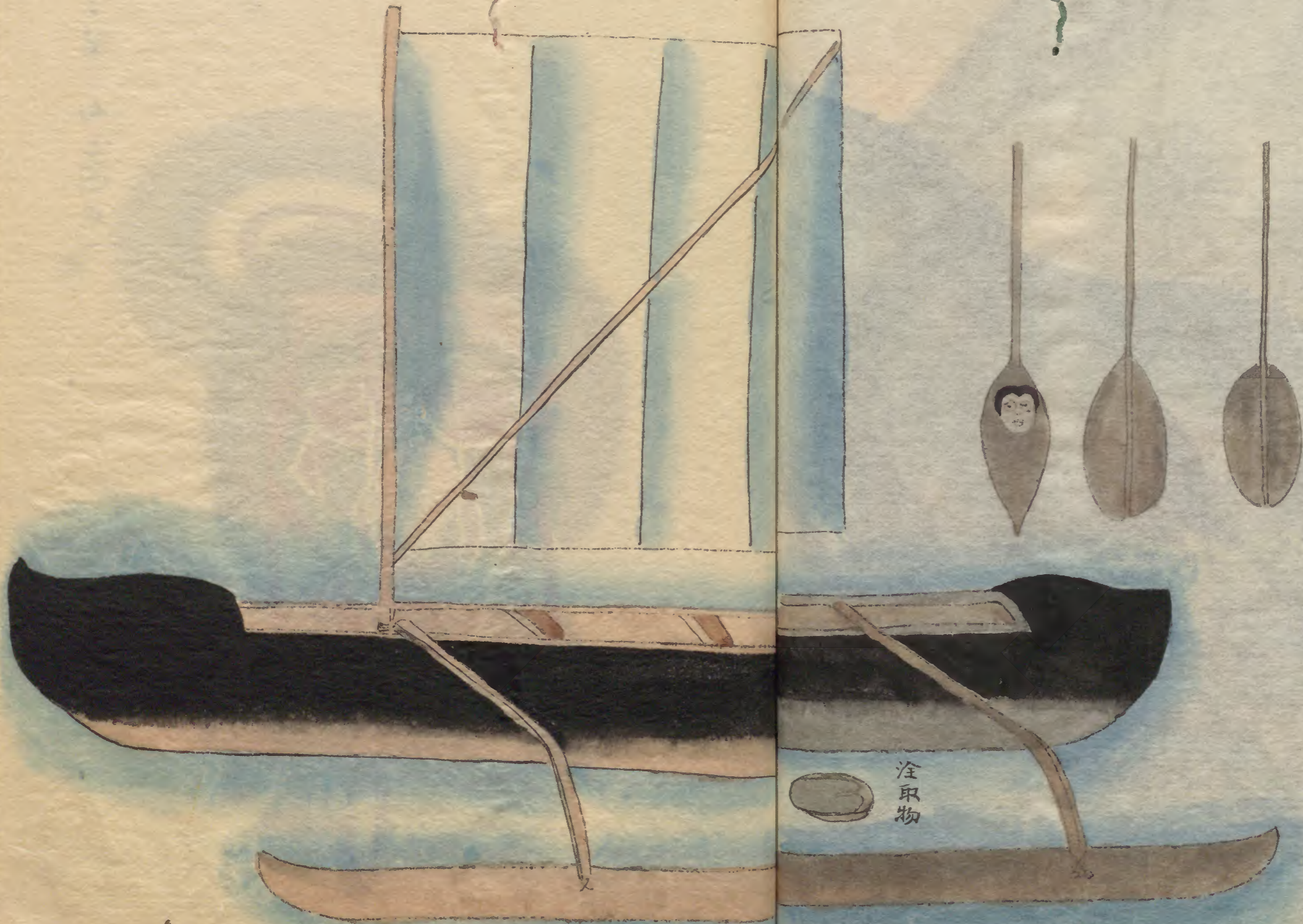
ヘンハートト唱
皇国人呼て野芭蕉或ハ野椰子ト
ソ翰稿桐ノ類一高拾間余度ヘリ

島中外國人の
家屋如図周囲
橘桐の葉を以て
草く



ク又一船之圖

此木を釘を丁造り島民
皆こきり葉りて漁鱒を風の
折柄を母島へ往還せしむ



注取物

ク又ー舩、装ふ面之圖之一補



文久元年辛酉有

命巡視小笠原島創置官府撫其住民受其任者外
國奉行水野筑後守與其僚屬調役由平太左衛門
調役並田邊太一書物方富田達三須藤誠二郎定
役元締佐小花作之助定役益田鷹之助同心松浪
權之丞目付服部煇一子其僚屬徒目付佐藤直三
郎松本三之丞小人目付林和一郎其他勘定深山
宇平太權普請役上村井善平司其資財兼測山川
江川太郎左衛門守附中濱万次郎長崎通詞堀一
郎通其言詞官送小野苓菴大垣藩送官本元道掌

其医療兼探物産繪景物而所坐咸臨官舩小野友
五郎統其指揮塚本桓輔松岡磐吉豊田港西川倍
太郎按其針路柴弘吉淺羽甲次郎鈴木録之助令
其運用杉浦金次郎喰代和三郎高橋榮司運具汽
機近藤熊吉掌其銃礮矢野沢次郎吉輅其用費外
有水夫從僕若干人以冬十二月三日發都至翌壬
戌春三月廿七日還為程个幾百里為日百十有六
日小笠原島真景回成乃附題姓名如左

大久保平平山

以爲是所由安之治重也
此乃東南海之系島也
精之印也所古路中
何之也之也何之也
此乃東南海之系島也
精之印也所古路中
何之也之也何之也
此乃東南海之系島也
精之印也所古路中
何之也之也何之也

之身好子有浦島の如く海を向ふ
波解ふはあまの建ふあまの心は地
物と見ふは地はあまの心は丹精
し物と見ふはあまの心は丹精
あまの心は丹精はあまの心は丹精
あまの心は丹精はあまの心は丹精
あまの心は丹精はあまの心は丹精
あまの心は丹精はあまの心は丹精
あまの心は丹精はあまの心は丹精
あまの心は丹精はあまの心は丹精

あまの心は丹精はあまの心は丹精
あまの心は丹精はあまの心は丹精

十二日

あまの心は丹精はあまの心は丹精

作

あまの心は丹精はあまの心は丹精

此物、山花作、玉、在、物、生、不
知、中、有、多、打、申、言、每、新、
世、得、其、多、一、物、中、生、月、
其、足、方、一、言、其、多、言、一、物、
有、者、先、其、物、中、生、一、物、
其、足、方、一、言、其、多、言、一、物、
其、足、方、一、言、其、多、言、一、物、

山花作、玉、在、物、生、不

山花作、玉、在、物、生、不

凝雲ハ筑後守忠徳カ致仕後ノ名也因ニ此書
翰ニ通ヲ摹寫載セ製圖ノ縁故ヲ知ル一証トス

真景圖二本アル旨ハ既ニ凡例ニ之ヲ如シ原圖
一本ハ小花作取カ所藏ヲ以テ疾ク本省ニ摹写
シ書庫ニ藏メラル具圖及又同人カ藏スル所ノ
再校圖ヲモ借り得テ對照スルニ總テハ大同小
異也ト虽氏原圖ニ脱スルモノモ亦少カラズ因
テ画図外務権少録河野雪巖ニ議リ兩圖ヲ參考
シ其脱ヲ補ヒ此圖ヲ製リ寫字生中島政信ヲシ
テ摹寫サセシメ以テ紀事ノ卷末ニ附シ參考
一端ニ備フ

真景圖二本アル旨ハ既ニ凡例ニ之ヲ如シ原圖
一本ハ小花作取カ所藏ヲ以テ疾ク本省ニ摹写
シ書庫ニ藏メラル具圖及又同人カ藏スル所ノ
再校圖ヲモ借り得テ對照スルニ總テハ大同小
異也ト虽氏原圖ニ脱スルモノモ亦少カラズ因
テ画図外務権少録河野雪巖ニ議リ兩圖ヲ參考
シ其脱ヲ補ヒ此圖ヲ製リ寫字生中島政信ヲシ
テ摹寫サセシメ以テ紀事ノ卷末ニ附シ參考
一端ニ備フ

一 部 二 部 三 部 四 部 五 部 六 部 七 部 八 部 九 部 十 部 十一 部 十二 部 十三 部 十四 部 十五 部 十六 部 十七 部 十八 部 十九 部 二十 部 二十一 部 二十二 部 二十三 部 二十四 部 二十五 部 二十六 部 二十七 部 二十八 部 二十九 部 三十 部 三十一 部 三十二 部 三十三 部 三十四 部 三十五 部 三十六 部 三十七 部 三十八 部 三十九 部 四十 部 四十一 部 四十二 部 四十三 部 四十四 部 四十五 部 四十六 部 四十七 部 四十八 部 四十九 部 五十 部 五十一 部 五十二 部 五十三 部 五十四 部 五十五 部 五十六 部 五十七 部 五十八 部 五十九 部 六十 部 六十一 部 六十二 部 六十三 部 六十四 部 六十五 部 六十六 部 六十七 部 六十八 部 六十九 部 七十 部 七十一 部 七十二 部 七十三 部 七十四 部 七十五 部 七十六 部 七十七 部 七十八 部 七十九 部 八十 部 八十一 部 八十二 部 八十三 部 八十四 部 八十五 部 八十六 部 八十七 部 八十八 部 八十九 部 九十 部 九十一 部 九十二 部 九十三 部 九十四 部 九十五 部 九十六 部 九十七 部 九十八 部 九十九 部 一百 部



Handwritten text on the spine, possibly a title or volume number, written vertically in a cursive style.